

豊かな感性を育む授業の創造

1 子どもの欲求や願いを授業に生かす

自分にとって「価値あるもの」に出会えたとき、人は心底「すばらしい」とか「美しい」と感じる。それを運動の結果でいえば、「やってよかった」、「本当に楽しかった」、「またやりたい」という思いであろう。そこには、運動との好ましい出会い・かかわりあい、その運動に対する欲求が満たされたととらえることができよう。

子どもたちのこうした「やりたい」という欲求は、運動そのものの魅力（運動の特性）や以前の学習によって得た楽しさ体験から生じるものであると考える。同じ教材であっても、授業構成や場の設定が違えば、その運動に対する思いは違ってくるであろう。「この教材ではこんなことをしてみたい」という子どもの欲求を充足させる授業であれば、学習は意欲的に行われるであろう。ただ、「こうしてみたい」という各自の思いがあっても、それを達成するにたる基礎的な知識や技能がないと行き詰まってくる。逆に、技能習得のみの学習では、自分の興味・関心とは違った受身の学習になる向きもある。思いが先か、技能が先かの問題ではなく、発達段階や運動経験の深浅によって、両者を融合的に取り入れた学習が大切になってくるであろう。

水越⁽¹⁾は、「基礎的な知識や技能を習得させるためには、比較的指導性の強いスタイルが有効であり、逆に、学び方や情意的目標を達成するためには、子どもの主体性を生かす方法が優れて機能を発揮する」と述べている。ある一つの学習スタイルにこだわることなく、学習者の自己実現の欲求に答えるためにはどういった授業を創造するかということが問題とされるべきであろう。また、「やってみたい」ことを提示する場合であっても、ただやりたいことをやらせてその場のみの楽しさを味わわせるだけでなく、学習の発展を見据えた教師の見通しが必要であることは言うまでもない。

そこで、「子どもが運動に何を期待し、どうしたいと願っているのかを理解し、その期待や欲求にこたえるにはどうしたらよいか」、「その運動が、それぞれの個人差に応じて発展性のある学習となりうるか」という観点から行った授業実践について述べてみたい。

2 実践事例—「跳び箱運動～着地ゲーム『ピタッと』～」（第4学年）—

(1) 跳び箱運動に対する子どもたちの欲求・実態

跳び箱運動はこれまで、「何段まで跳べるか」といったことや様々な技を発展的に習得・習熟していくといった、いわゆる「克服型」「達成型」のスポーツとして扱われてきた。特に昨今では、「できる跳び越し方をさらに上手にできるようになる」、「できない技ができるようになる」ことに着目した展開が多くとられてきたように思われる。これらは、指導者側の特性のとらえであるが、子どもたちは、跳び箱運動に対し、どんな欲求をもっているのだろうか。事前にとったアンケートでは、「何段まで跳べるか」「いろんな跳び方」といった克服・達成的な要素は勿論、「着地したところで点数を競う」「跳び箱リレー」など競争的な要素としても跳び箱運動を楽しみたいという願いをもっている。

跳び箱運動については、好き23名、嫌い8名、どちらでもない7名と、他の単元に比べ、否定的なイメージをもっている者が多い。嫌い・どちらでもない理由として、骨を折ったことがあったり、それを見たことがあったりして危険な運動であるという認識をもっている者や跳べないときがあるとか高い段が跳べないなど技能面に不安や不満をもっている者がいる。技能の実態（3年生3月時）としては全員が開脚跳びで跳び箱たて3段を跳ぶことができている。

(2) 授業設計の焦点（【ポイント】…運動との出会わせ方）

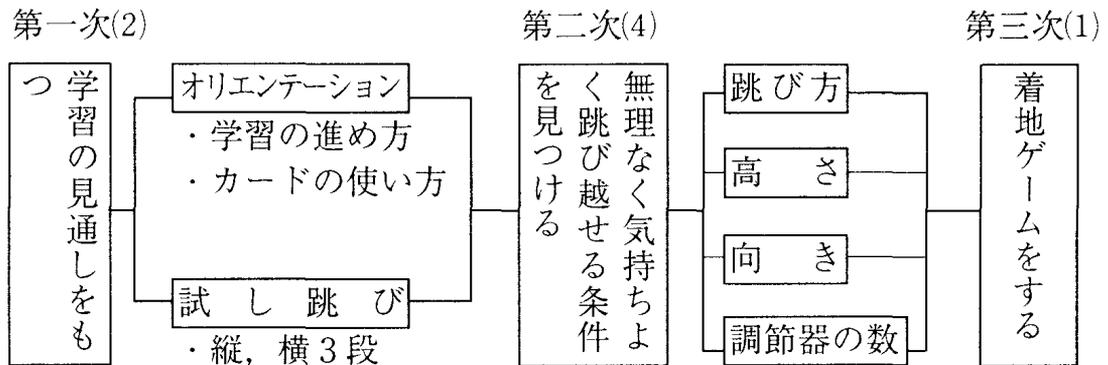
子どもたちの欲求・実態をもとに、「克服」「達成」「競争」それぞれの要素を加味した授業にしようと考えた。着地の正確さを得点化することにより、そのために自分はどのような跳び方や条件（高さ・向き・調節器の数）を選択すればよいか、自分自身の納得において課題解決していく授業としたい。また、オリンピックの体操競技のような、だれかに見せる演技としてではなく、自分自身の内面に着目し、「気持ちよく」跳び越すことにこだわりをもたそうとした。

そこで、学習課題を、

自分が気持ちよくとびこせ、ねらったところへピタッと着地が決まるように、跳び方や、跳び方の条件を見つけよう。

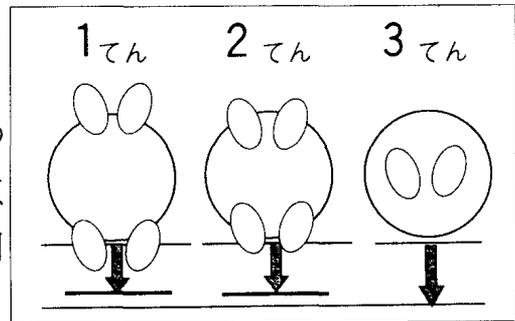
とした。

(3) 学習内容と指導計画 (全7時間)



※着地ゲーム…20cm間隔に印のついたメジャーマットの上に、自分がこの位置に着地するであろうと

いうところにケンステップを置き、着地した足の位置で右図のような得点とした。そして各自2回の試技の合計点を求めた。



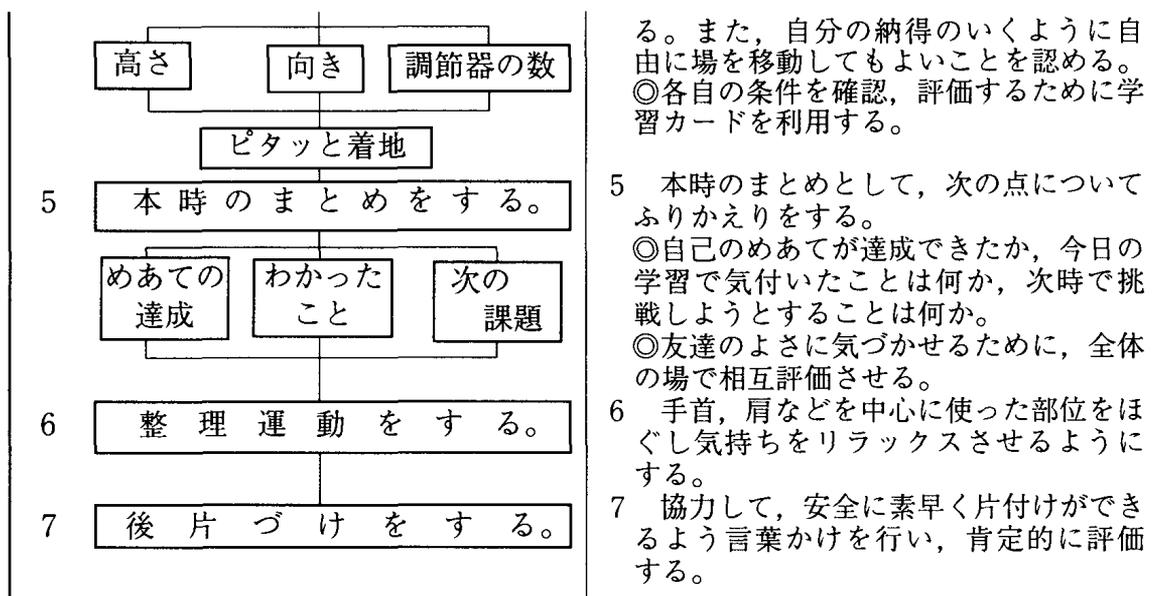
(4) 指導目標

- 自分にあった跳び方や条件を見つけて、ピタッと着地ができるようにする。
- 約束を守り、安全に気をつけて、準備・後片付け、運動ができるようにする。

(5) 指導の実際

第二次第3時の授業の展開をもとに、支援のポイントを述べてみたい。

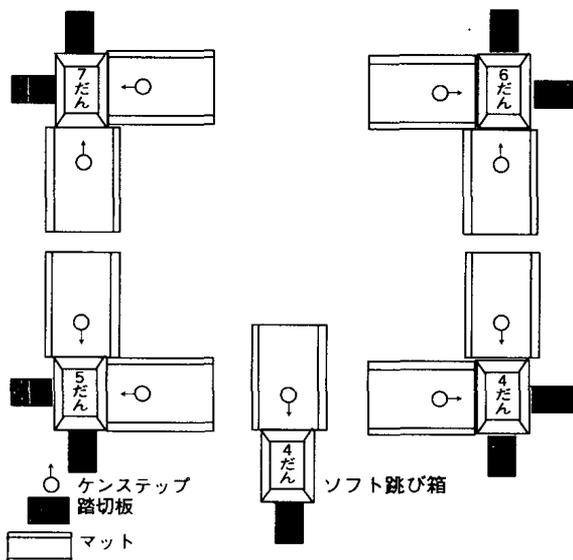
学習活動	指導・支援活動
1 準備運動をする 馬跳びオニ 補助倒立	1 逆さ感覚、腕支持感覚を養う準備運動を毎時間位置づけて行う。
2 場づくりをする	2 9～10人のグループで協力して、安全に素早く準備できるよう言葉かけを行い肯定的に評価する。
3 本時のめあてを確認する。	3 単元を通してのめあて「自分が気持ちよく跳び越せ、ねらった所へピタッと着地ができる」をもとに、本時は、踏切調節器を条件にいれてもよいことを確認する。
4 着地を考えて跳び越す条件を試す。	4 着地を考えて跳び越す条件を試すために、以下の点において支援する。 ◎各自のめあてに応じ、4～7・8段の跳び箱(縦・横)を選べる場を設定す



【ポイント】…学習集団の構成・組織化

本校では、走力やリーダー性等を考慮して、赤・白・青・緑の4色にグループ分けしている。1グループ9～10人である。授業の始めと終わりの集合・場の準備・後片付けは色ごとに行った。次の図に示した場づくりの1セットを各色が担当した。各自のめあてに応じ、自由に場を移動するため、課題追求においては、色別ではなく、各課題別での援助（調節器の増減、ケンステップの位置の確認等）が行われた。この学習は、「自分が気持ちよく跳び越せ、ねらったところへピタッと着地ができる条件」を見つけるため、技術的な面での援助よりも、各自の課題追求のための場の設定に協力体制がとられていた。

【ポイント】…主体的に課題追求できる場の保障



自分にあった跳び方や条件を見つける場を左図のように設定した。場の条件だけでも、高さ（4～7段）、向き（縦・横）、調節器の数（0～3個）、ケンステップの置く位置（ケンステップの矢印の先が10cm～100cmぐらい）とで、320とおりの（4×2×4×10）ある。さらに跳び方（開脚跳び・かかえこみ跳び）を加えると、640とおりにもなる。

【ポイント】…技術構造への着目のさせ方

これらの条件の中から自分にあった条件を整理・確認・評価するために、学習カードを作成した。

【ポイント】…評価による次時の課題の明確化

オリエンテーションでこれからどんな学習をしていくか、学習課題を提示し、学習方法を説明した後、次の時間からは、各自めあてとふりかえりをノートに記入するようにしている。

とび箱学習カード

年 組 ()

学習課題 自分が気持ちよくとびこせ、おらったところへビタンと着地が決まるように、とび方や、とび箱の条件を見つけてよう。

＜ためしとび＞…とべるかな？

		高さ	
		3段	4段
両	たて		
ま	横		

		高さ	
		3段	4段
両	たて		
ま	横		

●…ぼつらり
○…なんとかなる
△…もう少し

①とび方を決めよう。

②高さ 向きを決めよう。 ③着地足の数を決めよう。

高さ	向き	着地位置
だん		CR
だん		CR

高さ	向き	着地足の数	着地位置
だん			こ CR
だん			こ CR

● ぼく、わたしが、気持ちよく、おらったところへビタンと着地するためのとび方や、び箱の条件は、次の通りです。

とび方	高さ	向き	着地足の数	着地位置
	だん		こ	CR

着地ゲーム 1回目 点 2回目 点

体育ノート記入の仕方

月 日 () 運動名

めあて:

①自分のめあてに向かってねばり強く運動(練習)することができた。
②友だちと教え合ったり、助け合って運動(練習)することができた。
③まわりの安全に気をつけて運動(練習)することができた。
◎…よくできた ○…だいたいできた △…できなかった

<感想>
・どんな点について努力したのか } めあてをもとにして考える。
・どんなところがよくなったのか }
・楽しかったこと }
・なりたいこと など }

※ただし、新しい単元の1時間目は、めあてと自己評価①は行わない。

<記入例>

10月25日(月) 一輪車(1時間目)

めあて:
②-○

③-△ 前の人とのかんかきがせますぎてぶつかってしまった。

<感想>
初めて体育で一輪車をした。思ったよりもむずかしかった。でも○○君が「……したらいいよ」と声をかけてくれたら、少し乗れるようになったのでうれしかった。次の時間は一まで乗れるようにがんばりたい。

※学習カードはノートにはっておう。

とび箱運動

6月6日(火)

◎今日も、5mくちぎに気をつけてとぶ

①◎
②◎
③◎

<感想>
今日、クたんのたては、かりとんで、5mくちぎにたたくとまるのには、ユツかつかめまし、たしをんは、とびおわ、たとき、ひさをくらとまげれはらんとち、くちがてきました。つきは、今日より、とあくにやべるように、ひさを、とまけるといつめあてにし、たいと思いました。

つるんは、自分なりに着地のユツかつかめ、つたね、着地、つるんは、すい、次回、つたね、た、たね。

3 考察

(1) 学習課題は、自分なりのこだわりをもってめあて追究していくのに有効であったか

自分自身の内面に着目し、「気持ちよく」跳び越すことにこだわりをもたそうとした授業に対し、子どもたちはどのように取り組んだか。事前調査で、「跳び箱運動が嫌い」と答えた子どもの中から、K子の取り組みの様子と想いを体育ノートから抜粋し、分析してみたい。(波線は筆者)

事前調査より

わたしは、とびばこが苦手で、足や指や、いろいろけがをしたり、うったりしそうなのできらいです。

6月2日

わたしは、4だんはとべるんだけど、ピタッと着地できなくて、今日たても横もピタッと着地できたのでよかったです。それと、5だんの横は、先生はちゃんと着地できてると言ったけど、わたしはまだなっとくしないので、今度はなっとくできるように気持ちよくとびたいです。

6月14日

わたしは、7だんでやろうと思いがながらがんばっていたけど、6だんの横をとんでみると、こっちの方がやりやすいので、こっちにしました。やっぱり、「高いのができる」といばっているんじゃなくて、自分の一番気持ちよくとべる所の方が、大切なんだなと思いました。

6月15日

わたしは、きのう、調子がよかったのに、今日は、なぜかぜんぜん調子はよくありませんでした。着地ゲームの時にかぎって、ちっともうまくできず、0点と0点でした。たぶん、すごくきんちょうしていたので、できなかったんだと思います。すごくくやしかったです。

跳び箱運動の学習を終えて

わたしは、初め、とびばこがすごくこわかったけど、1回目で、4だんをとべたので、それで自信がついてどんどん高いだんをとんでいき、だんだんケンステップにピタッと着地できるようになって、最後には5点とれたので楽しかったです。

これまでの跳び箱運動で、跳び箱に対する恐怖感と苦手意識をもっていたK子は、最初の跳び箱で4段を跳んだことに自信をもち、学習を進めていった。特に6月2日、14日（波線部分）では、自分なりのこだわりや納得をもって取り組んだ様子が見える。そして臨んだ第1回目の着地ゲーム（6月15日）では、自分の力を思うように発揮できなかった分析と思いを書いている。翌日、第2回目の着地ゲームを行った。昨日と同じ6段横、調節器0、着地位置30cm、開脚跳びでの挑戦であった。見事に2点と3点の計5点を獲得した。もうこの段階では、跳び箱に対する恐怖感も苦手意識もなく、自分

のめあて（着地がピタッとできて、6点とれるようにがんばろう）を意識して取り組んでいた。最初に提示した学習課題に対して、こだわりをもって取り組んだ成果が表れたことが、楽しかったという思いにつながったのであろうと考える。これは、K子に限らない。単元終了後にとったアンケートの結果からも、学習課題に対するめあて追究の満足感から楽しかったと回答した子どもは、約半数いた。（【楽しかった理由】の太字部分）

「跳び箱の学習は楽しかったですか」

【楽しさ】

	楽しかった	楽しくなかった	どちらでもない
人数	37名	0名	0名

(有効回答37名)

【楽しかった理由】

跳べなかったのが跳べるようになったから	17名
気持ちよく跳び越せたから	13名
ピタッと着地ができるようになったから	5名
どの跳び箱の時間も頑張れたから	2名
跳ぶときの感じがとてもおもしろかったから	2名
コツをつかめば簡単にできたから	1名

(自由記述による。複数回答あり。)

このことから、「自分が気持ちよくとびこせ、ねらったところへピタッと着地が決まるように、跳び方や、跳び方の条件を見つけよう。」という学習課題は、子どもが自分なりのこだわりをもち、めあてを追究していく上で、有効であったと考える。

(2) 課題

「あなたにとって、『気持ちよく』跳び越せるというのはどんな感じでしたか」

ふわっと浮いた感じ	10名	第2次空中局面
高く跳び越せる感じ	3名	
すごく軽くなったような感じ	3名	
鳥のような気分になった感じ	2名	第2次踏切
踏切板を思いきり踏む感じ	2名	
着地がピタッと決まる感じ	2名	着地
簡単に跳び越せる感じ	3名	全般
すいっと跳び越せる感じ	3名	
緊張せずに楽に跳び越せる感じ	3名	
勢いがついて気持ちがよい感じ	1名	
わからない	4名	
感じなかった	2名	

学習課題に示した技能は着地だけであったが、「自分が気持ちよく跳び越せる」ことを授業の核としたことで、アンケートの中には、第2次空中局面を体験した気持ちよさをあげている子どもが多く見られた。このことは、助走－踏切－着手－着地の一連の運動の中で、安定した着地を求めることは、助走－踏切位置・強さ、着手位置などを各自が調節し、考えながら跳び箱を跳び越しているといえよう。ただ、着地を意識するあまり、跳んでいるときの視線が下がって、前につんのめるということも見られた。着地に合わせるのではなく、自分が設定した条件で跳んだときにピタッと着地できる場所を着地位置とする手順の再度確認なり、目線が下がらないための具体的な支援が必要であった。

4 実践をふりかえって

跳び箱運動において、子どもたちは「跳び越すこと」にそのおもしろさを認めている。それは、自分が客観的に評価できるからである。「何段が跳べた」、「着地がピタッと決まった」というふうに評価のわかりやすさが子どもの関心・意欲とおおいに関係しているといっても過言ではなかろう。自分が取り組んだことに対し、自分が実感としてわかる、納得するときにこそ喜びは増し、自ら進んで運動へ取り組もうとする姿勢をつくると考える。自分が自分で取り組んだことを自分で評価できることが、その運動に没頭する一つの要素であろう。

また、この授業が着地にポイントをあて、「気持ちよく跳び越せる」ことを追求できたのも、子どもたち全員が、跳び箱を跳び越せるという前提があったからである。基礎・基本の習得の上に、自分の納得のいく跳び方、条件を見つける「学び方」の学習が成立したといえよう。

《引用・参考文献》

- (1) 学び方の学習 水越敏行 教育出版
- (2) 明日にむかう体育 荒木豊・高津勝 編著 大修館書店

(須山 博充)